

三二郷土史「葛飾の郷」

船橋市 白石重男（北本町三丁目出身）

私が郷里の旧・高田市北本町から、最初の任地名古屋市に、新婚の妻を連れて赴任したのは昭和三十二年。私は長男

だったので、運命が味方してくれば、郷里に再び帰ることがあるかもしれないと、心ひそかに想っていた。あれから半世紀、二人の子はそれぞれ独立し、会社のすべての役職からも解放されて見ると、青春の頃には思ってもいなかった千葉県・船橋市にねじろを据えていた。

船橋市は、昭和十二年に船橋町と葛飾町が他に三ヶ村を合併して成立した。大戦では戦災を免れ、食糧事情にも恵まれていたので、永井荷風、太宰治、石川淳など多くの人が移り住んだ。船橋は古代東国の入口として、近世には神社参詣の宿場町として栄えた。船橋は現代の交通では一時間以内で都心にアクセスできる。このため昭和三十五年頃から、団地造成

マンション建設が始まると市民人口が急増し、平成十六年三月には五十六万五千人、県下第二の都市となった。

船橋市誕生の一翼を担った葛飾町地区も事情は同じであった。蛙鳴く田圃にJR西船橋駅が出来ること、交錯して営団地下鉄、JR武蔵野線ができた。近傍の標高十五メートル程の台地に建つ春日神社からは、葛飾田圃の先に塩田があり、東京湾の向こうに富士山を望む景観は一変、ビルの林立するところとなった。

葛飾は縄文早期に始まる貝塚を二つも持っている。弥生期には五領式土器が出土するなど、早いうちに部族や祭祀の流入があった。隣接する台地には下総の国府・国分寺・国分尼寺が造営された。葛飾では本郷台・印内台の台地から多数の竪穴住居跡とともに掘立柱建物跡や墨書土器、漆紙文書、鉄製品に鍛冶工房跡、埋

葬古代馬に金銅製馬具を出土して、郡衙かそれに近い政庁跡が想定されている。ここは九世紀後半の諸国郡名を収録した「倭名類聚抄」の栗原郷の中心部だった。

万葉集に詠われた古代葛飾は、太日川（現・江戸川）の流域を挟んで一部三県にわたる長大な郡城を有していた。葛飾（村）町の発足には、発掘調査が今日ほど進んでいなかったが、二郡惣社・葛飾明神」を奉祀してきた八ヶ村の人達の「葛飾の中心」意識は強く、そこに明治人の高揚する精神が籠められてあった。昭和四十一年の住居表示で一帯は「西船」となり、不動産屋がマンション住民の利便に沿うものとなった。

新興都市・船橋は公民館活動が盛んなところである。現在、市内には二十五の施設がある。その葛飾地区の一つで、郷土史や民話をやっていた私どものサークルが、往年の企業戦士や、お子さんを連れられたお父さんで馬頭観音の説明にも困っている人たちのために「かつしか歴史散策マップ」を作った。

これが葛飾の先住者にも、新住民にも好評だったので、西船地区町会連合会から、文化事業として三二郷土史「葛飾の郷」の出版依頼を受けた。自身が渡来入、新住民であったが、郷土史家S氏の協力、地名研究会・市史編さん室などの支援を得て、三年をかけ、ようやく完成。目下、

お盆に入る前に連合会の全戸、一、一、〇〇世帯の無償配布を終わろうと、印刷製本を急いでいる。

郷里を出てから四十七年。今も青春時代の郷里を想いながら、私のような郷里をもてなかつた人、第二の郷里を見つけれない人達のためにボランティアを続けている。

